

「層の厚さ」

1) 「オペラ長岡物語」

2023年12月の長岡経済・連携会議はゲストスピーカーをお招きしてお話をお伺いすることができた。今回のゲストスピーカーは11月に「オペラ 長岡物語」が長岡市立劇場で上演されたが、その台本を担当された長岡在住のチェロ奏者、片野大輔氏である。

彼は長岡高校の卒業で、お父様は銀行にお勤めされていたということで、我々のメンバーの中にはお父様の元部下だったという人もいた。チェコ国立の芸術大学を終了後、長岡に戻られて現在はプロのチェロ奏者として活躍されておられる。

2) オペラは歌舞伎

さて、オペラの話。西洋の演劇と音楽によって構成される舞台芸術がオペラで、歌劇とも呼ばれる。オペラを発展させたのは17世紀のモーツァルトでフランス革命後、民衆の娯楽の中心であったという。その意味では、オペラは日本の歌舞伎と同じような意味に捉えることができるかもしれない。西のオペラ、東の歌舞伎ととらえると親しみが湧く。

現在のオペラは「市民オペラ」などとして、地方の民話などを題材にした新作オペラが上演され、地域の文化レベルの指標ともなっている。

3) 開館50年

ちょうど、2023年は市立劇場開館50年の節目にあたり、長岡の音楽家たちを結集させる意味でも長岡オペラを上演しようということから、幕末の長岡の偉人の想いを次世代へ伝えようということになり、開府400年の時に作成したミニオペラ「戊辰の苦悩を乗り越えて」を再構築した。長岡の民話も組み込み、長岡の文化を再発見する機会ととらえ、今回のオペラ台本が片野氏により作られた。

4) スタンディング・オーバーション

このオペラ上演を私もみさせていただいた。オペラはお芝居である。歌舞伎のストーリーも時間空間を超越したお芝居として、庶民の娯楽として発展した。その意味でも、このオペラに厳密な真実性を求めるものではなく、お芝居として楽しめば良いと思う。その意味で、子供が小学校の学芸会で舞台に立つのを家族全員で見にゆくような気持ちで拝見した。事実、舞台に立った役者さんたちは、昔私も舞台に立っていたことがあるが、その頃の仲間が演じているし、他にも何人かの知り合いが舞台に立っていた。他の観客も同じように、知り合いが舞台に出てくると、大きな拍手を送って声援していた。最後にカーテンコールは腕が痛くなるほど拍手を送っていた。長

岡の人は席を立て、「ブラボー」などというような声援の送り方はしないが、もしその場で誰かが立ち上がって声をかけたなら、きっと全員がまさに総立ちとなったであろう。

5) Easy come easy go

片野氏は今後の長岡の文化発展に向けて、ここでしか味わえないコンテンツ、長岡オリジナルをつくってゆこうと述べている。そして、それは大変だが、“Easy come easy go”難しいからこそやりがいがある。クロスオーバー、異業種交流の価値を述べておられた。

6) まとめ

最後に、我々は経済・産業連携会議だが、片野氏の芸術文化関係ともコラボすることで地域の厚みが増すことだと再認識させられた。これからの長岡発展のために広がりのある出会いであったと感じた。